

イカナゴの異変

変動のシグナルか

最近では教科書に載っているようなシベリヤの高気圧が姿を見せない無いなあ。北西の季節風はどこに行ってしまったのだらう」

七年続きの暖冬にベテラン予報官のつぶやきが聞こえてきた。かつて瀬戸内海のイカナゴ漁は、この季節風が強く吹くと豊漁、弱いと不漁という相場となっていた。

備讃瀬戸あたりで産まれた魚が冬の季節風でできた流れに乗って明石沖に運ばれ漁となる。ところが一九七五年を境にこの関係が崩れてしまったという報告が、海洋学会のシンポジウム「一九七五年になにが起ったか」の中にあった。

ロシア目をに転じれば日本の広さに匹敵する世界最大の湖、カスピ海にも期を同じくして異変が起きている。五十年間にわたって下がり続けていた湖の水位が、一九七七年を底に急激に上昇に転じ、九二年には遂に二メートルを超してしまった。

もともとカスピ海は海抜以下で逃げ出す道はなく海のような湖が二メートルも水位が上昇したので影響は深刻、湖を取り巻くカザフスタンやイランなどの周辺諸国でも大きな社会問題となってきた。

これとは対照的に水位の低下でよく話題に上が隣のアラル海は対照的に十三メートルも水位が下がり、さらに低下し続けている。カスピ海へは大河ボルガ川がウラル山脈から西の東ヨーロッパ平原に降った雨や雪を集めて流れ込んでいる。この広大な平原に影響する地球規模の流れに何かが変わってきているのだろうか。

一九七六年は東北地方の「やませ」襲来でもエッポクメイキングの年である。東北農業試験所の調査では、この年を境に太平洋側では十三年間に八回の冷害が起きており、以前の倍のペースとなっている。瀬戸内海のイカナゴから送られてきた「一九七五年からのシグナル」は単なる地球の変動のリズムなのか、それとも何か異常を知らせるシグナルなのだろうか。